

八月十日戌辰朔日戌辰朝霧、四時比より晴、厚曇、地震  
小許、

文政十一年九月六日（舊曆六月）江戸地震ヲ

＊（續王代一覽後記）

同日九 六日夜戌刻江戸地震

文政十一年十一月十二日（舊曆十月）越後國地大ニ震ヒ、  
蒲原、三島兩郡震害多シ。就中三條・燕・見附・今町  
與板等ニテ八家屋ノ倒潰夥シク、特ニ三條町ハ全潰シ、  
死者四百人ヲ出シ、且ツ全町焼失セリ。見附モマタ全  
潰、全焼ス、震災地全般ヲ通シテ潰家九千八百八戸、  
焼失千二百四戸、死者千四百四十三人、負傷者十七百  
四十九人ニ及ベリ。

〔内題狀留〕

大政十一年十一月廿三日、御目番大久保加賀守兼  
御退出江、御届書差出、

私領分越後國蒲原郡の内、當十二日卯下刻頃大地  
震に而、一ノ水戸村陣屋内、家居不致相潰、即死  
人も有之、其外村、目録の儀に而、怪我人等も  
數多有之由、相關候得共、未確と相分り不申候旨  
被地誌家來共より申越候に付、先此段御届申上候、  
猶委細之儀、追而御届可申上候、以上、

十一月廿三日

松平 錫

右に付大目付石谷備後守兼江も、同断御届書差  
出、

十一月

一三島郡脇野村、潰れ人数四十軒餘、死伤人十八餘  
怪我人多く、其外在々、右同様、同郡與板町、皆  
潰れ同様、漸く人家二十軒許り、寺三ヶ寺相殘り  
候得共、長吉潰れ同様、死伤人七十人餘、怪我人  
數不知、其外在々、右同様、長岡町之儀は潰家二  
十軒許りも有之候得共、無難同様、信濃川通り見  
附町、家數二百軒餘有之處、皆潰れ、出火、不殘  
燒拂、今町、家數同様皆潰れ、出火、内當支取所  
村々、其外村々十ヶ村、皆潰れ、出火も有之候御  
面地大熊北、割口上り、齋村木青泥吹出し、三條町  
皆潰れ、出火、不殘燒拂、出火之儀は、十二日朝  
五ツ時方夜八半時近、死伤人四百人、怪我人數不  
知、三條町より三四里東まで、數十ヶ村、皆潰れ  
大地相割れ、材木青泥吹出し候儀は右同断、村々  
死伤人、怪我人、未不相知、信濃川西岸町、皆潰  
れ同様、死伤人數相知不申候、近在村數十ヶ村、  
右同断、西側彌彦山附村々、無難候由、彌彦より  
吉田町江道法二里、東吉田町、家數五百軒餘之處、  
百軒許りも潰、死伤人相知不申候、新鷄町、無難  
同様、寺泊より海邊は、格別之難も無之趣、其餘

遠方之儀は、未風聞も無之候、右之通り風聞書取寫  
呈上候、以上、

文政十一子年

十一月十四日

出雲崎  
陣屋元  
町役人

文政十一子年十二月十二日、御用番松平昌防守隊共  
左之邊差出す、

先達而御届申上候、私領分越後國蒲原郡之内、二  
十七ヶ村、去月十一日夜より大風雨にて、翌十二  
日朝に至り、小雨風烈之處、卯中刻頃より俄に大  
地震致し、即時に一ノ木戸村陣屋内、長屋土藏等  
潰潰、其餘村々百姓家、寺社等、揺潰半潰等相成  
り、即死、怪死人、多分有之、同時内藤紀伊守領  
分、同郡三條町より出火、私領分之内、右家續村  
々、家居揺潰候後、類焼仕、其外川添村々之儀は  
雷爨、割裂缺崩等に相成、且村方に寄、田畑割裂  
音砂吹出し、道路割潰候場所も御座候、右箇所、  
左之通り、

- 一 陣屋内長屋潰
- 一 同土藏潰
- 一 同門潰
- 一 同物置潰

- 五棟
- 一ヶ折
- 一ヶ折
- 一ヶ折

- 一 同長屋半潰、一棟
- 一 同社半潰、一ヶ所
- 一 同草屋半潰、一ヶ所
- 一 同草番小屋潰、一ヶ所
- 一 同構板堀大破、所々
- 一 同郷藏破損、一ヶ所
- 一 同役藏破損、一ヶ所
- 一 百姓家潰、千百八十四軒
- 一 同潰之上類焼、百三十八軒
- 一 同半潰、五百二軒
- 一 土藏物置潰、二ヶ所
- 一 同潰之上類焼、二十八ヶ所
- 一 同半潰、十ヶ所
- 一 郷藏潰、三ヶ所
- 一 同半潰、五ヶ所
- 一 寺潰、七ヶ所
- 一 同潰之上類焼、一ヶ所
- 一 同半潰、五ヶ所
- 一 堂并拜殿潰、四ヶ所
- 一 同半潰、四ヶ所
- 一 高礼場半潰、一ヶ所
- 一 埃割裂缺崩、千九百五十九間
- 一 江長九十間程揺廻、一ヶ所

一即死人、

百四十五人

内 四十三人

男、

百二人、

女、

一怪牧人、

百九十六人、

一蹇馬、

三尺、

右之通御座候段、彼地差置候家來之者共より申越候、此段御届申上候、以上、

十二月計

松平 錫

〔甲子夜話〕

○我十一月下旬、左右ノ人云フ、坊間ヲ高呼ノ賣リ行者アリ、小圖ヲ携フ、求メミレバ、越後國地動ノコトナリ、予趣取リテ見レバ、左ノ如シ、○圖ハナルホド其後モ都下往々コノ風説アリ、予ガ居所モ其頃少シク地震セリ、思ヘバコノ日ニヤ、又松前氏ノ老臣嶋崎某ノ養子伊三郎ナルハ、予ガ久シク知ル者ナリ、近頃末リニフ、松前ノ商船、鮭、鱈ヲ多ク積ミ大船五艘、ソノ頃越後ノ海ニガ、リキシ所、皆行キ方ヲ知ラズ成リシト、サスレバ彼地ノ海中モ、波濤大ニ起リタルガユエニ、浮船モコレガ爲ニ漂搖シテ、遂ニ破裂セシカ、抑地面震スレバ、潮水モ亦激怒スルカ、又予ガ内ニ、此地ノ東本願寺所縁アル者アリ、コノ本願寺ノトリ沙汰ハ、越後ノ便リ曾テナシ、サスレ

バ彼地東本願寺農環ノトキ、寺内ノ僧侶、悉ク壓死シテ、申送ル者ナキ故ナラン、却テ同州他人ノモトヨリハ、地動ノ變ヲ云越セシ者モアリシト、又予ガ方ニ、久シク出入スル匠ニ貞セト云アリ、生國越後ノ者ナレバ、便ハナキヤト聞クニ、曰、某在所ハ柏崎ト云所ナリ、此地ハ舊カノ東本願寺ハ、同國高田ニシテ、相矩ルコト二十餘里、然ルユエカ、頃口便り來レル路ハ、十一月十二日朝五ツ頃ヨリ地震シタルガ、コノ町方ハ、他ニ比アレバ強キト云ニモアラズ、家居ユリ倒レタルコトハナク、所々土藏ノ壁落タルト云ホドナリ、ナレドモ井ナドハ、所ニヨリ底ヨリ木バ土、或ハ沙ヲ吹アゲテ埋リタレバ、村方ナドハ、所々春水ニ函レリト、又鍋釜ヲ商買スル家アリ、コノ地動ノトキ、棚ヨリ上ケ置シ物震墜テ、人モ器モ破創ノ者多カリシト、又カノ本願寺本堂十二間四方、庫裡三十間餘、幅十何間、悉ク震倒シタレバ、其シタヨリ火發シテ、堂舎焼失スト、因テ京ヨリ輪番ノ僧侶、ミナ焚死スト、慘キコトドモナリ、又コノ本願寺ノ邊、或ハ新潟ノアタリハ、分ケテ震動シテ、五百人餘ノ死亡、潰家ハ末ダソノ數ヲ知ラズ、林子曰、今年ハイカナル凶年ゾマ、參遠駭甲信及關

東、各處、洪水ノ疾アリテ、ソノ後九州風濤ノ變ハ、古今未嘗未ノ事ノ由、長崎在住ノ蘭人ドモハ、世及ヲ冊行スル者ドモナルガ、カ、ル大風ト云コト、西洋ニモ嘗テ聞ザルコト、評セリト云、人民ノ死傷、驚ヲ起シコトナリ、又北越ノ地震モ、メヅラシキ許ノコトノ由、景モ亦人ヲ傷リシコト、予ヲ以テ數フト云、太平ノ世、カク人命ヲ空ク損壞スルコト、數ズベキノ甚キナラズマ、

○續編二十一卷ニ、戊子年十月、越後國地動ノコトヲ言キ、後諸方ノ申狀ヲ見ルニ、聞シニモ勝レリ、其云々、コレ其略アリ、餘ハ其詳ナラズ

私當分御預所、越後國三島郡脇野町村陣屋最寄之儀、當十一月十二日曉八時、大風雨、大時雨雨も相止、黒雲一圓天を覆ひ、自然震動之音相聞、何となく怪異之様子も御座候處、同日朝俄に大地震、遠近之郷里、暫時に火煙を上げ、人之聲山林に響く程之儀、陣屋諾脇野町、吉岡村、上岩井村、多分之家數、即時に相潰、通路に瓦石を飛し、即死怪我人等有之候付、陣屋諾寺代共、即刻為取締出役、火之元嚴重に防方取計、先火災之患は相遁候得共、誠に不慮危急之天災、漸命無恙免れ候者共逆も、家財悉く打碎、剝出來秋取入候米穀に至迄不殘散亂いたし、引續十五日迄四日之間、日木之

震動不相止、假成無難建家之分も、震動之度毎に追々及潰、此上急變之程無覺束、家宅住居難相成平野に逃去罷在、大勢之者共、當年之大食は勿論寒氣之疾方手當に差詰り、危難に迫り候次第、右は國中一體之事に候得共、重に三島、蒲原郡村々之内震動強、一村皆潰、即死、怪我人等多分に而山附より里方は則強、山附之村々、山崩立木根返り、里方村々、大地割破れ、砂水吹上り候村々も數多有之、其外脇野町村最寄、私領、寺社領村々之内、一村皆潰之上、出火にて多分之潰家數多也悉く焼失、人馬怪我夥數有之趣、且脇野町村陣屋之儀も、悉く大破におよび候儀之旨、彼地諾寺代共を申越、變事不容易儀に奉存候、委細之儀は、追々可申上候、先右之段御届申上候、以上、

子十一月廿日

御代官 野田 谷 吉

子十一月廿七日、御用番大久保加賀守様御返出止差出、

越後國三島郡之内、私領分、去る十二日辰中刻、地震強、所所割、潰家、怪我人、即死、左之通御座候、  
一七日市陣屋役所半潰、  
一同半潰長屋、  
二棟、

一 同半潰土藏

在中

一 潰家

一 半潰家

一 怪死人

一 即死人

一 怪駝馬

一ヶ所

三十五軒内家

五十五軒

五人、内男四人

六人、内婦三人

一尺

右之外、又大破候人家、數多有之候旨、同所差置候家系共方申越候間、此後御届申上候、以上、

十一月廿七日

松平山城守

子十二月二日、御用番松平岡防守藏江御届

越後國蒲原郡之内、并粟村外五ヶ村、高二千三百石餘之場所、去月十二日辰半刻地震強、潰家、破

損所、怪死人、左之通、

一ヶ寺

一 同破損

一 百姓潰家

一 同破潰家

一 土藏破潰

一 板藏潰

一 同破損

一 物置小屋潰

一ヶ寺

一ヶ寺

百三十六軒

三十四軒

四ヶ所

二棟

十五棟

三十九ヶ所

一 鄉藏破損

一 即死

一 驚馬

右之通御座候、尤同國岡郡館村陣屋并在町共、致地震候得共、別條無御座旨、在所般人共方申越候、此段御届申上候、以上、

十二月二日

十二月二日

柳澤 澤正少將

二ヶ所

十五人、内男六人

一尺

子十二月十六日、御用番松平岡防守藏江差出之、

先達而御届申上候、松領分越後國蒲原郡三條、去月十二日辰刻地震強、其上出火に而、陣屋門長屋

土藏等損潰、又は半潰に損破、三條町并同郡之内五十五ヶ村、三島郡之内十五ヶ村、寺社町家百姓

家等、揺潰、或半潰、或は焼失に而、死人、怪死人、數多御座候、且災破損所、山藪、田畑割裂候

場所も多分御座候、潰家其外箇所、左之通、

一 陣屋門潰

一 同長屋潰

一 同半潰

一 同稽古所潰

一 同圍板藏潰

一 半潰

一 同破損大破

一ヶ所

七ヶ所

六棟

一ヶ所

三棟

一棟

一ヶ所





一怪我人、百六十八、

一潰家、六百廿軒、

一同燒失、十七軒、

一潰長屋、一棟、

一半潰家、三百七十三軒、

一大破家、五百七十軒、

一神社半潰、一ヶ所、

一堂社大破、五ヶ所、

一寺庵半潰、二軒、

一寺庵大破、十五軒、

一社家大破、三軒、

一土藏潰、十ヶ所、

一土藏大破、九十六ヶ所、

一鄉藏半潰、二ヶ所、

一高札場潰、三ヶ所、

一即死馬、七匹、

一穢多家潰、一軒、

一同潰家燒失、一軒、

一山崩、三十三ヶ所、

一土手往還、并所々地割、幅五六寸位分七尺位迄、

一川缺、六百五十間餘、

石之通御座候段、彼之地差置申候家來共申越候、此段御座申上候、

十二月廿三日

并伊石京亮

振丹波守藤方、以奉札爲御知申來、

丹波守藤御領分、越後國蒲原郡見付驛、并下田郷

近邊、去月十二日辰申刻、地震強、處々破損等、

左之通、

一高札場潰、一ヶ所、

一同大破、一ヶ所、

一潰家、四百四十三軒、

一潰燒家、百五十九軒、

一半潰家、三百七十一軒、

一破損家、三百廿一軒、

一水押家、三軒、

一潰宮、一ヶ所、

一潰寺、八ヶ所、

一半潰岡、四ヶ所、

一潰藏、十七戸前、

一山崩、百五十一ヶ所、

一川缺、貳十間程、

一江筋潰、三千四百七十五間程、

一堰拔落、十三百三十九間程、

一悪水吐底極損、七ヶ所、

一道路、二千三十八間程、



一田畑所

三十六町七反五畝廿三  
步餘

一即死人

二百三十人

内男八十八人  
女四十二人

一怪死人

二百廿六人

内男八十七人  
女五十九人

一斃馬

十一疋

一怪拔馬

七疋

右之外、在中所々破損、一體之儀に而、田畑御損  
毛不少、尤御在所、近在共、破損も有之候段、御  
届書、御用番藤江被差出候之旨、爲御知申來

大政十二丑正月九日、御用番松平和泉守藤江差出之

口土之覺

私在所越後國蒲原郡新發田領、去十一月十二日辰  
之刻、地震強、潰家、死失怪死人等も御座候付、  
同日、御用番大久保加賀守殿江、先御届申上置候  
然處城下方廿里餘隔候場所、其上潰家、堤破損等  
過半之儀、窮民守充等に而、巨細之取調出来兼、  
御届之儀、年越に相成候段、舊曆廿九日、御用番  
松平南防守殿江申上置候處、此節申越候趣、左之  
通

一高札場潰

一ヶ所

一田畑地割砂吹出處

二百八十一町四反步

一堤破損

一萬四百十六間

一潰家

千六百六十軒

一半潰家

七百十五軒

一破損家

五百四十四軒

一潰寺

八ヶ所

一半潰寺

九ヶ寺

一破損寺

五ヶ寺

一潰庵

二軒

一潰堂社

六ヶ所

一燒失家

百廿一軒

一潰堂社

十ヶ所

一燒失土藏

十ヶ所

一潰板藏

廿七ヶ所

一横死人

二百十五人

一燒死人

廿七人

一怪死人

内男九人  
内女十八人

一斃馬

百三十六人

一怪拔馬

内男七十三人  
内女六十四人

一怪拔馬

廿二疋

右之通御座候、尤城內別條無御座候、此段御届申

上候、以上

正月九日

溝口伯耆守

丑二月廿五日、御用番水野傑江差出之、

去子十一月、私領分越後國蒲原郡三條、地震其  
上出火に而、陣屋、其外破損箇所、并村々潰家  
焼失家、堤破損所、死人、怪我人等取調、同十  
二月、御届申上候處、其節行衛不相知、散亂仕

候者共、其砌遺路難相成場所等有之、此節追々  
立戻り候處、右之内怪我人等有之、或は當春靈  
解に相成、死亡之者見出、又は堤破損之箇所も  
有之候付、巨細取調候處、先達而御届申上候外  
猶左之通相増申候

一堤通破損所、

五千三百間、

一死人、

九人、内男大人、

一怪我人、

七百四十六人、

右之通御座候段、彼地差置候家來共申越候付  
此段猶又御届申上候、以上、

二月廿五日

内藤紀伊守

舊職、御用番周防守様江同文書之内、

申越候付、其段水野此羽守様江御届申上候、去  
年御届申上置候儀も御座候付、此段申上置候、  
以上、

二月廿五日

内藤紀伊守

以上ノ所録、堂宇居屋威槽ノ壞損ハ、コ、二算七  
ズ、死亡スル者千四百四十三人、怪我人二十四百  
九十五人、斃牛馬五十疋、實ニ天災ナル哉、

〔大地震曆年考〕

文政十一年十一月十二日、越後國長岡邊大地震

越後國三條より返輪之寫し、

御見舞御狀相届、早速御返事並上可申處、延引仕  
如御追追向案之砌御座候得共、其御表無御別條、  
扱此度當所大地震爲御尋、松魚一箱、御憑扱被成  
下、御深切之段、忝存候、扱霜月十二日朝五ノ時  
頃より、夥敷政震動、大地震ゆり出し、夢中にて  
家内表裏分遣出し、居宅土藏、微塵に相成候上、  
近邊方出火にて、一時之煙と相成、脊得肩腰頭等  
ラたれ候人々、中には目鼻口方血を吐きかろ、遺  
れ出ると、狂氣の如く苦み堪果、手負死人其數不  
知、何れも逃出し、行先地面割、砂を吹上、老若  
男女とも足を挟み、泥水を吹出し、往來成兼、風  
は烈敷、其上火之粉を吹立、火煙を冠り、東西南  
北へ逃行、恐敷事、前代未聞之事に御座候、村上  
新發田、與坂、長岡、村松、桑名、會津、高崎、  
其外御領之御陣屋、御旗本家、思々に御守當被成  
下、難有事に御座候、空曇り、露降出し、寒氣相  
増候故、小陰も無之、たゞすみ候事も成兼、追々

風吹凌事あははず、目も不堂次第に御座候、下拙  
家内は不申及、親類共送怪我人一人も無御座候、  
御安心可被下候、御見舞松原、各為配當、御蔭兼  
にて元氣相増、御深慮之段、不致難有奉拜上候、  
先荒増御返事奉申上候、いづれ出府之砌、萬々  
御禮可相送、早々如此御座候、恐惶謹言、

＊「小泉大庫所藏記録」〇其時著

山水の轉變 文政十一年霜月十二日辰刻より越園い  
たく地廣ひり、山嶽の脱出せしもの長岡領にては大  
百六十餘ヶ所、又大面町の上下村松領域にて大いに  
脱出せるもの十ヶ所、皆田畠をくつがへせり、其他  
僅に崩れおち欲下りなんといへる地は枚舉しかたし、  
其中に専ら支とすべきものは堀瀧川といふ川を塞げ  
るなり、この流は刈谷田川の枝川にて其源村松領  
下夕田郷に出づ、水流といへど流る、水なり、凡一  
里餘皆山間にて水おほく出づ、故に見附町の郷地一  
萬石餘の水田も此水を引いて足れりといへるを、山  
崩れて流れを塞ぐ所六七ヶ所晝夜に湛へる水いと高  
うなれるが、一帯に押出す時あらば流末河辺の掘溝  
村の家居皆覆りなんと衆民やすき心なかりしを、翌  
る春に至り領主の命令にて壘をわりて其ふさがりし  
地をさらはれしかば、覆ひをのぞき皆よろこびしと  
云へり、かゝる大変なりしかば彌考山一丈ばかりも

(五六)

ゆりあがれりと云ふもあり、又は三里ほど海中へ  
突出せるなど妄説をいひはやせど、後に聞けば地  
震のせりは山いたく鳴りし事は正しく有りし事な  
り、江河の大小となく地震のときは水減じたり  
しこと前々の渡守らが現に見しところ、又上り下  
りの船子共は地震と心つかで水の逆立つを川くだ  
といふ難ならんかと狼狽まはりしと云ふ、暫時の  
うちなれば舟をそこまふほどの事はなかりとぞん  
今井新田の獵犬徳松は此時鐵砲提げて川島に出で  
ありしに、川中所々波立ちのぼること或は五六尺  
又一丈ばかり、岸辺はひきしほの如く數町陸と生  
れるを見しといへり、凡て江河の堰缺下り、ゆり  
盛めて川床高ふ押出し、又池沼の類ひも岸をくほ  
め水中へ砂を瀝出し、平地より高くなれる所もあ  
り、山地の井筋は凡て山崩れて所々ふさがり、平  
地のは大かた水をゆりあげ雑喉蛙など常にさまよ  
へり、

長岡領鴉ヶ島の井は水路凡二里、村松領は貝ヶ島  
井水路凡一里半共に山地にあり、皆埋れて其跡を  
失へりと云ふ、凡そ平坦にして堅硬の地は破裂し、  
弱土は陥り砂ばかりの地は無事に近きことおほか  
たの様なり、故に鴉ヶ島の森村の前線信濃川堤外川原  
幅二三尺より二三間、長二三十間より三四百間、

・深三四尺或は八九尺所々破裂す、又陥りしところ數ヶ所にて井新舊川原地なども又之に同じ、前須田村沢戸ある所より城腰といへる舊地へかけ凡そ長二百間ばかりのうち地裂けて砂入りの水を吹出し、新之丞、孫七、孫八などが宅中へ水押入れり、古老の口碑に傳へ來し須田川あと、いへるあたりにては細やかなる芥木又松の實など埋れし所多く、茲島新田入野といふ舊地にては長八九尺、周圍四五尺ばかりの畷みたる埋木をゆり出し、曾根新田砂川原にても同じく周圍二尋餘、長八九間ばかりの大木をゆり出せり、此等のものは幾許りの年を経しか知るものなし、横場新田志治左衛門が宅地竹藪の地裂けしところより黒砂入りの水を吹出すこと高五六尺、近隣の家宅へ水押入りて皆逃げしといふ、又曾根新田佐助は畷をすりてゐたる新、地震ふりきたるに驚き逃げ出で、宅に入れば糞所の下より砂水を吹出せるが、摺りだての水を押ながし、末室村門柱師が宅中も同じく許多の砂水を吹出せり、後爐中の砂を取りのけしに二尺許り下より巳が茶釜を振り出せる類かぞへ難し、又七日市村某妻井戸のもとに茶かまみがきて居りしがゆりだふされ、起きんとせしに茶釜なし、必災地の裂けたる穴の中へ落ちたるなりんと、七八尺ばかり

りの竿もて其穴中を探れどとゞかず、七八寸許りの小珠に綱付け穴中をさがせしとぞ、又庄川村曹洞宗庄川寺の如尚山玉村にゆきて留守の時、山ゆり崩れて庫裡を倒す、留守せし僧侶和尙の父傳助ともに庭にかけ出で難をさく、又がて僧等傳助が行方を尋ぬるに知れず、然るに庭中五六尺、七八尺ばかり長く裂けたる前四五ヶ折、若し誤りて其穴中に落ちしやと竿もてさがせど、悉く掘穿らんには多くの人夫入り、雇ふべき人もあらず、かくする内壁降り續り件の彼の裂口も三四川まで雪に埋まり尋ねる候を失ひき、今に行方知れぬは果して測けたる口に陥りて活ながら尋ねられしならんと、脇川新田邑長幸藏が宅前の井戸は深三間にあまり、奴等水を取みたるあと汲桶の井戸に投げ、凍はしを井筒に結びつけおきしが地震ひしとき、候の汲桶を人ありて投げ上げし如く井筒のうへ三四尺も飛び上り、又元へ下ると見しほどに水わき上げ曲輪にあふれ出で其流れにさよはれ汲桶庭に響び出し、其味のかぎり流れ出で、止む、翌朝幸藏井の辺に待きて見しに、湧出し白砂四辺に濺ち、井中をのぞけば水は元のまゝ、をさまりぬと見ゆれど、石を投げ入れみれば初めより深くなりて水の味ひもまされると、上飯内村長泉寺の井水は清らかにして味美なりと世

人は云へるを、水溜れば必ず變ありと古人傳へ來りしが、此年六月頃濁り、又十月の末濁あるを聖人心おちつかぬに、聚して大塚におひ、かの寺は本堂、太子堂など破壊し、庫裡は倒れ里の家は同じ様になり、死に失へる人さへありといへり、  
妙法寺村と月岡村の間を提灯持ちて往來するもの、其提灯に火つきて焼きにけり、初め四五人がほどは已が粗末より出せしと思ひ居たりしに、日數経ちても人毎に皆同じ、こは狐狸などのわざにもあるかと後に變化のもの出る由噂高くなりて、灰は往來するものなかりしに心あるもの哭を考へて、此地中の火氣の盛んなるが真火を契ふるなるべしと、抑も此如法寺村百姓左右衛門圍爐裡の隅に石臼をおきて、それに孔を穿ち其穴に土中より吹出る風に真火をかざせば火となり勢ひ強く燃立てかぎりなくもゆること世人普く知るところなるが、地震になり後火をかざせば其烈しき事常より三倍の火勢を發すれば、出火をおそれしか日數をへて又常の如くなりぬといへり、元來此あたりは水田の中水滂々するところ、陸にては土中より風吹出る氣味ある所數多ありけり云々、  
地勤の光 十一月七八日頃より日々曉方より晨時はかりに霧の如き氣立ちて、其深き時は僅に七八歩先に立てる人さへ見えかた、又空はれわたりし時は

太陽の周圍五彩たなびき虹にひとし、氣候も大むねそむけて高山すう壁を見ぬ暖氣につれて、萬木芽を生じ隣國、水徳自ら花ひらけ、山葵、款冬花を市に鬻ぐ、秋人後のうれひを知らねば春にあへる心地して物足り且暮のやすきを悦べり、十一日の曉日出るまへ東南の方雲の色朱の如く、已の時はかりには雨ふり風あれど、さのみ差おらずして止む、十二日八聲の鶉の鳴く頃風音あり、全くあけわたりに南西の方雲色すきまもなく黒く旭の色朱の如く輝けり、快晴ならんと思ひしに辰の時ころに至り、西南の方に雷の如き音あるとおぼえし雨もなく大に地震ひ來りて、一瞬の間に幾多の變をなして衆人の憂苦を發せり、抑も昔より變は他國に折々ありし事書にも見え話にも聞きしなれど、自ら此難にあひみては世に地震ほど恐ろしきはなしと勉めて感じ思はしむ云々、  
地震示様 地震のゆり來る嶺山野にありて見たる人の話によれば、始め西南より風立ちて砂はこり眞黒に煙り立ち來る其の勢ひ、大波の衝くが如くうね立ちて地をゆり立て東方へすき行けり、其筋に立てるもの樹木は地を種ぐにひとしく、行人は皆振り倒され、又地の裂けたる口に轉び落つるもあり、此時尾崎村善慶寺の住持は朝とく起き出で飯をも食せず三條町に至らんとする途にて此難にあひたり、されば

起ることを得ず、ゆくりなく倒れながら東方を見れば、彼方なる山々暫時出沒せし由を語る、又直木新田撞八といふもの、其里近き江溝の中に難免すくひてある折から此難に遇ひ江の中にふり倒され、頃にははちかぬて岸にとりつきまほひあからんとせしに、目前なる田島大波の押しゆく如く捲たて、庄瀬村のかたへすぐ、しばしがほど俄の里頃はれかくれつして見えたりと云へり、又入蔵新田邑長源兵衛は蔵内村邑長勘兵衛とともに、此日吉野屋村より帰路鴨ヶ池村を過ぎ繩手道にかゝる時、この地動に遇ひて後へるろはざるを起さんとすれば又前へ倒さる、其のかわきたる田面をゆするごとく液濤に似て所々ごみ砂を飛ばすこと煙の如く、また、く間に一滴の水なき田面を泥水あぜの半をひたせり、翌る日其辺にゆき見るに水はなく、所々に地の破裂せるを見たり、まのふ見し所は何れも皆地を砕破りし時のわざなるべしと語せり、また我隣邑某の家の前に建てる門（高一丈三尺、地の間八尺）あり、左右の本柱にほらびて和柱といふもの立てせるが、石にて根継ぎして深さ三尺程土中に埋め置きしを突きあげたれば、左右の堀をはなれ戸さし薄ばされ、五七間ばかり隔りて並にたてり、此等の若によりて地震のすぐる様と震源の強く驚く其の烈しきさまを思ふべし、

＊（新發田年譜）

十一月十二日朝五時大地震あり、中之島組今町潰家、焼失家、怪状人夥敷、其外組々潰家あり、當座御手宛五百俵御液、田畑地割砂吹出場所二百八十一町餘、果破損一萬四百十六間餘、潰家千六百六十軒、半潰家七百十五軒、破損家五百四十四軒、寺八ヶ寺、半潰九ヶ寺、焼失百二十一軒、墜死二百十五人、焼死二十七人、怪状人百三十六人、驚馬二十二尺の御馬あり、（高田三條最も甚し、右に村衆多の御手宛あり）同十一月米價引上、山島組々食民御手宛あり、同十一月米價引上、山島組々食民御城下上端小屋掛、駒御手宛被人數三千十六人に至る、翌年五月引揚、此年御損毛高一萬二千二百九十八石餘御届あり、文政十二年七月十二月六百二十六町二朱、潰家並に焼失家、死七人へ御手宛被下、此年二萬二千二百九十石餘御損毛の御届あり、

＊（長岡市史）

舊日十二日朝は一天只朦朧として息氣烟の如く立昇るやうに見え、晝夜四十餘度の震動あり、翌十三日も十八九度の震動を感じ、其後尚餘震が續いた、傾内損害の大略を告へば、城廓に於ては本丸を始めとして役所・門・堀、柵等殆んど大破し、

城下潰家 二百二十軒 大破 七百十一軒

郷中潰家 三千五百二十二軒 大破 四百六十軒  
土蔵潰倒 二十戸前 大破 五百五十三軒

死者 四百四十二人 負傷者 五百五十二人

社寺倒潰 三十二 大破 七十七

田畑荒廢 九百五十五町步餘 山崩 六夏十五所

倒木 十八百四十六本

其他道路・橋梁・圍堤・樋水道・用水江・溜池等

の損害挙げて數ふべからず、實に空前の慘狀であつた

＊〔兎園小説拾遺〕○瀧沢馬琴著

文政十一年戊子冬十一月十二日、越後州大地震の風聞あり、その事を板して巷を賣りあるきたり、長岡は城も聊破損して、死せしもの疵をかうむりし士族凡百九十餘人なりしとぞ、この事公儀へ御届の人数也と云、その他三條村松、新津、燕、今町、栗板辺、又十里四方、この地震によりて蘆舎倒れ、人死すること三千餘といふ三條に本願守の掛り所あり、この邊殊に甚しく、本堂十二間、庫裏轉倒し、剃火してければ、一宇も残らずとぞ、予が相識なる鈴木牧之は、越後魚沼郡鹽沢の里長也、聞くに鹽沢辺は恙なし、當時地震も甚しき事なかりといへり、  
この十一月十二日の地震は、江戸も朝辰、頗震へり、婦幼等が驚き立程に鎮りにき、越後は本日朝辰の比より未牌まで震ひしといふ、しかのみならず

十一月初旬より新々地震あり、終に十二日に至て甚かりけるとぞ、

文政十一年戊子冬十一月十二日

朝五時越後長岡領地震之記

一長岡町、潰れ家十八軒、半潰廿三軒、横死四人、

土蔵壁落三百八十宇

一長岡北組村々八三十三ヶ村、潰れ家千八十五軒

半潰四百十五軒、怪抜人百四十五人、横死百八十八人、寺院十一ヶ寺、馬五匹、長屋廿四軒、深山

御藏、

一長岡栃尾組村々、椿沢、家數百三十軒有之處、

建家纔に六軒残り、横死二十四人、

一八回田井村、同二十軒有之處、建家三軒残り、

横死十七人、

一八回棚野村、同百三十軒有之處、不残潰れ、横死三十七人、

一八回太田村、同六十軒有之處、建家三軒残り、横死十七人、

一八回栃尾町、此栃尾町は潰家も有之候へ共、格別の事無之候、乍去城山大疵入候間、抜落候は、可及大變とて、栃尾總町小家共轉宅大騒動之由、

一見附町、總潰家の上、失火にて焼亡いたし、やうやく五六軒残り、横死人、怪抜人甚多、未その數

を知らず、

一、今町、建家不殘潰れ、破り候家五六軒に不過候、  
災も半潰れ也、

一、三條町、潰家二千九百十八軒、右潰れ候上失火に  
て大松焼亡、残る所二三の町少し残り候へ共、災  
も半潰也、但三四十軒残り候よし、横死八百六十  
人、怪状人は數を知らず、本願寺掛所、四坊皆潰  
れ且焼亡畢、

一、脇野町、潰家五十七軒、横死人は無之よし、此處  
は輕し、

一、與板町、潰家三百五十軒、半潰九十軒、横死三十  
五人、

右與板より長岡迄在々、潰家無之は稀也、救擧に違お  
らず候、

加茂、芝田、新津、水原等は無難の由、乍然土藏の壁  
は大かた崩落し、庇等はいたみ候へ共、他處よりは輕  
く御座候、

一、拙家の入魂、三條の小道具屋小高屋宅右衛門と申  
者の粹、齒に參居候處、右地覆にて早速下船仕  
候、然所、同人の家も潰れ且焼亡、土藏も墜落候  
に付、直に火か、り、鍋一つ出し不得仕合に御座  
候、此小高屋は北越第一の小道具屋にて、珍敷茶  
器刀剣掛物等致所持候處、不殘焼失、其上地震後

雨雲に成候故、立ばも無之罷在候に付、御堂の潰  
れか、る大門先に一夜あかし、寒さに不堪候得ど  
も、翌日に至り一飯を贈るものもなく、只失火の  
處へ近付候て、火にあたり命かり、災候よし、  
三條は越後の中央にて、金銀融通よく、富家多  
候處、一時に灰燼となり、良家の女房、娘、平生  
家綺羅に候へば、その絹布の上へ雨雲を受、無足  
非蕪俵を身に覆ひ、兩三日路頭にさまよひ候事、  
古今未曾有の珍事に御座候、家の潰れ候下では、  
やれ助けてくれ〜と叫び、或は泣きけり候有様  
あはれなりし事よし、種々承り候事も有之候へ  
ども、筆紙に盡しかたく候、父子夫婦の間、眼前  
に横死の有様を見候得ども、いたし方もなく、貴  
賤となく家毎に、五人三人焼死し候へども、葬を  
助るものもあらず、銘々焼跡の畑などを穿て、そ  
のま、埋め候もあり、或はその死骸知れず、辛じ  
て骨を拾ひ候も多し、家は潰れ候へども、手傳ふ  
て片付るものもなし、土中は大かたわれ候て、泥  
をふき出し候間、往來も自由ならず、その混雑怒  
嘆、可被成御察候、鹽澤邊は當時何事も無之、無  
難に候へ共、度々小地震に困り入申候、今朝も一  
度、晝後も一度地震にて、火難も氣つかはしく、  
家内のもの一統におそれ申候、亂書御判じ御高覽



可被成下候、

十二月三日

鈴木牧之拜

此状已丑口月廿八日、江戸新大坂町尺袋商人二見屋忠兵衛持參被届之、依之その詳なることを得たり、則之、に追書す、故之は予が舊友越後鹽澤の里長なる事前にいへるが如し、災物鋪にして且半炭なるものなり、

大政十二年端月念九

著作堂主人録

追加

越後魚沼郡市の越といふ村の持山に、船山といふ山あり、いかなる故にこの名あるや、知るものなかりしに、右の地震の比、この船山の瀆間崩れて長さ丈許横四尺船石出現出しけり、これ自然石にて凹て船の如し、宛も石工の手に成れるに異ならず、この磯神子の口よせにて、目村の鎮守の社頭へ曳着たりと云、壬辰の夏鈴木政之が狀中にこれを告ぐる、明後録于此、

＊ハ六帖首記

越後三條地震、つづれ家あり

＊ハ大恭院實紀

○十二日、越後所々地震す、

＊ハ續王代一夏後記

同日十二日辰刻江戸毛地震餘程強シ、

＊ハ震雷考説

平正山

(111)

近くは文政十一子年端月越後の地震には田の水川の水あた、かにして小魚悉く浮みいづる、

＊ハ飛彈地震年表

大政十一年十一月十二日

＊ハ慶弘紀聞

十二日○大政十一年十一月越後三條本城村長岡等大震、三條地獄、庵舎盡壞災、壓焚死者無算、本城寺堂独木壞、

＊ハ巷街談説

○慶哉

○越後大地震は、今茲文政十一子年端月十二日なり、辰の刻頃俄にゆり出す、長岡、新潟、三條、今町、夏附、與板、つばめの在々村々、數多の家々ゆり崩すに、大地われて泥砂を吹出し、親は子を捨てて子は親を捨て、うろたへさまよひ迷さわぐに、ゆり潰したる家々より火さへ出てもえたち、悪風烈しく黒煙天をおほふて、あやめもわかず逃行く先を火焰に包まれ、東西に走り、南北に迷ひ、怪人死人の數をしらず、震納りても凡百餘騷動止ざりしとみや、漸振立小屋をかけた集り住し、又山岸に穴を掘て住へるも多かり、今年はわきて寒さはげしく、雪さへ度々降りて、かゝる難儀の假住ひにて、病も猶多かりき、村上、新潟、與板、長岡、村松、桑名、倉津、高崎の諸大名、其外御料御陣屋旗本衆も、思ひく、に手留あれど、事廣くして行届かたく、越後

ことごとくかん吉に絶たり、稀代の變事なりす哉、  
木ハ前代未開實錄記〇卷之七の所載

十一月十二日辰上刻越後國大地震、古志郡蒲  
原郡之内、大損じの場所あらまし左之通、

一、〇〇〇宿長を牧野備前守兼御領分長岡を三里之間、  
田畑大に損じ大地裂け土砂吹出し、村々人家數多  
崩れ候得共、死人は無之候、

一、長岡城下四の町にて一軒、千加大寺にて三軒崩れ、  
田畑八軒荒野三百軒餘の處二十軒計相残り、跡皆  
崩れ、長岡を今町迄三里の間に、村數あまた有之  
候得共、通り筋村々にて家數二十軒計り相残り、其  
餘總崩、

一、今町八町程之在處一丁計り残り、二町半焼失、其  
餘は崩れ、死人五十人、焼死は不知數、けが人同  
断、

一、見附宿家數六百餘軒之處、漸く三間相残り三町計  
り焼失、残は皆崩れ死人六十人、焼死不知數、け  
が人同断、

一、元町にて寺一箇寺相残り、其餘は皆崩れ、此邊坂丹  
後守藤御領分大茂宿を善峯、其外本成寺迄三十箇  
村總崩れ、

一、三條町家數二千軒計りの處、二丁にて十八軒、大  
手下にて三軒、鍛冶屋町にて表通十軒残り、寺は總

樂寺西願寺二箇寺のみ残り餘は焼失、尤も藏土藏  
共、死人四百四十人、焼死人獨百人共數相分不申  
候、けが人同断、

一、東本願寺梅所御座は勿論、御門臺所座敷廻り不殘  
焼失、此邊之村々大損申候、

一、一の木戸松平右京大夫様御領分町家總崩れ、死人  
百六十人、けが人、焼死未だ相分不申候、

一、貝はけ新田少しの村に候處に御座候得共、家數三  
十軒程地中へ三尺計り埋り、怪我人十八人、其餘  
死人多く有之由、

一、粟津村にて寺一箇寺残り、跡は皆崩れ、近邊近在  
此寺へ死人持参り如山との由、

一、與板井伊兵衛少輔兼御領分町家千軒計りの處、三  
つ一分残り、其餘は總崩れ、死人五十人計りと申事  
に候、

一、陽之町半崩れ、其外近在村々莫大に損じ候得共、  
未だ相分不申候、

一、下越後千の原家田五畝此邊は如何相成候哉相分不  
申候、只筋計り荒増申來候、

右番若久寶寺町中橋筋西へ入る南側金屋平兵衛と  
いへる金商賣致し候者の方へ越後傳意の者より申  
來候書附の寫まり、

文政十一年十一月十二日辰の刻越後國古志  
郡蒲原郡大地震の事

一、妙見宿是分牧野備前守様御領分長岡が一里之間、  
田畑大に損じ大地裂け土砂吹出し、村々人家數多  
崩壊へども、死人は無之候、

一、長岡城下四の町にて一軒崩れ、千〇大 寺にて三軒  
崩れ、神田にて八軒崩れ、新町通三百軒之處、十  
軒計り相残り、跡不殘崩れ、

一、長岡分見附宿今町邊迄三里之間、七八箇村有之、  
其内家數二十軒計り残り、其餘村々總崩、  
一、下今町八町程之所、西一町残り二町程焼失、其餘  
不殘崩れ、死人五十人怪我人數不知、

一、見附宿家數六百軒餘之所、三軒残り三町計り焼失、  
残り總崩、死人六十人、焼死怪我人數不知、  
一、元村寺一箇寺残り、其餘皆崩れ、此邊は坂丹後  
守様御領分、

一、大西村にて八軒崩れ、是分山通りにて所々家崩れ、  
本城寺村總崩れ、

一、三條東本願寺掛所御堂残りず焼失、町家二十軒計  
りの處、二町にて十八軒、大手下にて一軒、鍛冶  
屋町表通り一軒残り、寺は外宗旨也、極樂寺西願  
寺二箇寺残り申候、其餘は家土蔵共不殘焼失、死  
人四百六十人、焼死怪我人は幾百人共數不知、並

き村々大破壊、

一、一の木戸宿松平存京大夫様御領分、町家總崩、死  
人百十六人、焼死怪我人未相知、

一、中野村大々屋出口門崩れ、小々屋家崩る、  
一、貝はけ新田村々御座候處、家數三十軒程地中へ三  
四尺落入、怪我人無事人十八人残り、跡は皆死人、

一、黒津村寺一箇寺残り、跡は皆崩れ、死人六十人、  
一、與板井伊民部少輔様御領分町家千軒計りの處、三  
つ一分残り、跡總崩れ死人五十人餘、

一、脇町代官所家數三百軒計りの處、下町者不殘崩れ、  
上町は大に損じ、其近在村々裏大に損じ、木は不  
相知、

一、地震十二日辰之刻分同十八日迄ゆり通し、十八日  
仕立飛脚候り、右の通荒増申参り候書狀、十二月  
九日寫、

右外方へ申参り候書付にて、前文と少々相違の  
所之あり候に付寫置く、

十一月十二日朝大地震公儀へ御届之寫  
越後長岡御城下五十三軒潰家  
二千四百七軒 在方潰家  
四百六人 死人  
千五百餘 半潰家

越後長岡御城下五十三軒潰家  
二千四百七軒 在方潰家  
四百六人 死人  
千五百餘 半潰家

千五百餘

怪我人

七十箇寺

濱寺

十五人

坊主

牛馬數不知

三箇所御米藏

御城下藏三百七十の内、用立藏三つ

三條加茂與板等米だ評判取々にて實説不相分候事

\*(越後國三條地震大變記)

越後國蒲原郡三條町大地震大變之事并出火入

死事

一文政十一子年十一月十一日夜暮六ツ時方屋の落  
ル事螢の飛が如く又雨の降かまく、諸人不思議の  
思ひをなし所に、翌十二日朝五ツ時頃東南の方方  
鳴出シ五六里四方大地を動り上候事五度也、六度  
目には東御坊を始メ六里四方の町在々寺院過半ゆ  
り崩し先ツ震初ニ名高キ三條御坊十五間ニ拾貳間  
の本堂八九尺程五度ゆり上大度目にはゆり崩し候  
誠に其日は如何成因縁に哉凡千人斗の參詣有之所  
内に居候ものは木に打れ死るもの有又は手足を木  
に敷れ立さけぶも有、又外へ逃出る者ハ大地の割  
口へ落込死るも有、木の下大地の割レ穴にて泣き  
さけぶ共難有て早速助ケる者もなし、その内ニ大  
地の割口々火燃へ出し御坊臺所遷之移り大火に成

八方へ火廻り候得共地震中場の事なれば誰火を消  
者もなき故一面の火を成、御開山聖人手づから作  
らせ給ふ御木像を始め御深筆の御名號并御代々の  
御書御判物敷通本山代々御影等并御坊開基傳  
來之空物不殘焼失諸參詣老若男女共即死の者は祖  
師の御木像と共に生なから火華に相成、木に去か  
れ半死半生のもの故遁る事不叶泣きさけび居候内  
に老若男女所化信ニ至迄五百餘人無異非相果候、  
夫方阿弥陀堂も拾貳間四面の本堂火移りゆりつゞ  
れ、御本尊始七高祖代々の御影不殘焼失、空藏大  
藏新部屋并厨屋とも不殘ゆり崩シ焼失、釣鐘は蓮  
池之落入、堂は將大門高塚みちんに崩れ焼失、惣  
方老度と一面のほりふと成生ながら火あぶり阿彌  
泣きさけぶ声眼前に遠り、大極熱の地獄ざりと聞  
人々驚かぬ者はなかりけり、此時生きたるものは  
皆々うろたへ泣わめく斗りにて平生御聽聞の安心  
は何の御用やら誰か老人念佛申ものもなく即死の  
残り半性の者は御助けと聲かぎりなくよばば  
り、在家は勿論寺々の坊主達並も念佛を打忘れが  
たふふるいしてうろたへ泣居たり、中々おそろ  
しき事言筆筆紙に演盡しがたし、平生御催促の安  
心 勸化法談の時黄色なる声して汝か、共の褰鏡  
賣り門前町の遊女に賣し誠に佛罰哉、又ハ神國に

差れなから神明を暴略いたし候神罰哉、平生王法を以て表とし内心には神へ上ル儀あらは此方之上よ、神明宮へ上ケると桓帥上人の御意に背置理杯と申勅メ候故に此度の天罰哉、又は神罰哉、生ながら地獄へ落入候者共右御坊所境内斗りにて五百餘人恐しき事也、扱又御坊所門前町兩側諸國方參詣人兼往來の諸人旅宿の者二階作り又ハ三階作りにてりつばなる家作にて昔々賣女大勢召抱置諸人の金錢を貪取候懸所故畏も同時之ゆりつばれ御坊所の火移焼失す、中々逃出る事不叶して百人余焼失す、夫々本町通り分船町通東本願寺小路大町通りニ之町通此町内ニ村上内藤紀伊守様御陣屋有、御家中方様々被思召候得共地震の事なれば弓箭鉄砲にても埒明不申詮方盡てぞ見へにけり、一の町通り三の町通四の町通此所ニ上州高崎様御陣屋有五の町通り六の町通小庄 町此所ニ村上様御陣屋有、振町通此町ニ五十嵐川在川向方も火燃立三條町方何れの町もゆりつばれ候事故追々火移り惣方一面に災となり、老若男女牛馬等並不殘焼死候逃出候者へ木に打れ死るも有、又地震にて割口へ落入る者も有、割口貳三尺分貳三間深サハ貳三間分八九間十間並も在之、地震ゆり候事故歩行事不叶如梓尺元分割口へ牛馬共落入死るもの數知れず

又割口今焼砂吹出し候所も有又熱湯のわき出る所も有、又ほのふ吹上り所有、後には惣一面の火と成、人も木も家も牛馬もゆりたをされ大地震の有様前代未聞の事共也、扱又其中に不思議在之、三條町中の産神八幡宮御社在り、大社なれば本社も多く有今度の地震少しも障りなし、大鳥居石燈籠數拾本境内の立木に至並少も障る事なし、何れ此御宮へ参行候ものは少の怒なく一心不乱に祈念して居ゆよし、其外町在共に五大里四方の内大社小社に至並官地の分神居ます所は地震少もゆる、事なし、石燈籠は不及申鳥居立木は迄本にてもたれる事なし、誠に此度の地震は神國にて不思議なる事に候、其後命有る者に今に地震の氣かあるとい、氣介悪敷病氣に滅者もあり、又は地震に割口へ落込半死半生にて悲むものもあり千差万別なり、扱焼屋敷に而滑捨ふ者もあり、ふすぶり候死骸集め自分の屋敷にて火葬にして弔きもなし僧もなし、涙ながらに納るも有、此度の地震中々萬端筆紙に盡しかたき誠に十分一の事記置也、

一三條御坊始諸宗寺院地震崩の事

附焼失又半崩死人の事

東下寺  
 福空山空林寺  
 東下寺  
 福空山空林寺  
 東下寺  
 福空山空林寺

東下寺

正樂寺

山形公廣  
焼死

願教寺

山形公廣  
焼死

善生寺

右月町

禪宗曾洞宗

萬年山 福生寺

前焼

大日山 宗正寺

半崩  
庫裏惣焼

少林山 定明寺

半崩

法華宗

本國山 寶淨寺

本堂半崩  
區敷少し焼死

浄土宗

盛樂山 極樂寺

三限生忍金  
焼死  
半崩也

多宝山 宝塔寺

半崩

真言宗

藤沢山 淨口寺

半崩

安樂寺

半崩  
庫裏入込

徳正寺

半崩  
僧家四人死

永樂寺

僧家四人死

右の外畧末寺多ク候得共塔頭の寺院旁舎敷しれず  
焼寺多ク御座候得共筆に盡し難く返而可記

一三條町並ニ在中入込々御領前並地震崩焼死人之事

村上領内藤肥前守(町在五分通り地割レ三分割口  
四五尺の拾間余リ)

同領 上双呂村(大分通り地割レ同前此辺割口分  
熱帯わさある)

同領 時田村(同前割口分わさ出た山の如し  
緑青色の砂世にたいなまむひ也)

其外村上様御領崩れ焼敷不知

上州高崎様御領三條町在共大分通り焼失

村上様御領三條町在共二六分通り焼失敷不知死人

百三十四人

不浪徳左馬助蒙領分七分通り崩焼男女百五拾貳人死

紫田城主水口伯耆守様御領三分通り崩焼死人貳拾人

三條在中崩焼死之事

見所宿五百軒程町寺拾ヶ寺崩焼死人男女子供百六拾志人牛馬犬とも貳百四拾尺程

三條町々今町宿は三百軒程也、災も甚以大崩寺方町家土藏物置小家迄不殘焼失、死人百五十人余、但宮地障なし、

加茂町宿にては崩斗焼失なし、木にラたれ死入人七拾人、尤宮地は少も障なし、地震割口より緑青色の砂吹出し、其匂ひの悪敷事世に類なし、巻度かぐ人は立所にて氣絶し、又は病人になる人もあり、

今町宿にて三尺斗リとも見へる白尺なる四尺なるやうな化物出るよし、

大は地震ゆり出候へは何れも山を見掛て疾り行たるあり、後にはかつゝ風に及候得八町方へ帰り焼けくすばりし死人を喰てたすかりしも有、又在町々町々へ用向にて出る人々多く焼死の分見付次第に楳に入、馬に附帯るも有、又町方に崩

は志軒に七人迄死たる家もあり、是等は其家々の屋敷にて灰寄して片付る者もあり、寺方並も大混雑の事故弔ふ事なし、自分々の勝手次第何事に而も其儘打捨置也、

一 摠見村不瀆徳左久助様御預分にて化生のもの出て人を口たる事あり、

一 万願寺村中新田より志里の原有、此所へ晝過より化生のもの出、姿は眼は目に見へ兼候、白き綿の様成ものに行當るよとおもへば口分細き物にて打とおもふと、惣身骨崩れ骨なしになりたるもの廿人もあり、又即死の者拾人余もあり、

不瀆徳左久助様御家中へ段々御吟味被仰付候得共、姿のなきもの故無詮方其日を送りける、

辺に鉄砲の名人有、常々心掛ケ有者故に鳥渡隣村へ行にも鉄砲不放持参して罷出、然に向の方に何か白き物あり、雲ならは天にて有筈、地より出るは難心得と思ひ、右鉄砲を持って貳匁玉を込み、薄白き所を的となし、火蓋を切れば、柀の化生の物に當り、立寄見れば猫ほとなるものにて手足は小兒の如し、顔は甚夕口口手足には水かきあり、脊には四五分程の薄き鼠色の毛あり、腹には毛なし、鳴声はしちりきを高く吹出したるべく、誠に此世に是迄見ぬ珍敷もの成り

と、夫々徳左久助様之御注進申上候處御見分被仰付、右化生の物も地震の割口より出候ものにあ、水かきと云い毛の短き所は口口の如し、其後影干にして不瀆様御預り、

御公儀様元御口口の様に御座候鉄砲の名人鉄砲支配被仰付、當座の御褒美として金子貳百足双見村百姓万左エ門と申もの右鉄砲の名人かくまひ置候故御扶持も被仰付哉と皆々誉ぬ者はなかりけり、

一 地震の事聞て付地震逆地斗に而はなし、雲も一面ニ其氣立候哉たち鳥とびからす等迄皆々ふぬけに成立ちあがつては落地に居る所の鷄も初めは鳴て立上り候得共みなくふぬけになりとはくして居候、驚驚逆も鳴事せずして遠方へも不行唯うろくとして居候、世界中灰の降りたる如くにて四方とも見へ分らず肝心の念佛さへ打忘れ夢中に成此世からいましめの地獄を見て心の内にて恐入誠に神力の尊き事は限なし中也、  
右は越後國三條町大地震にて大變の越荒増漸を聞施咲一山主奥州元婦村之節三條に宿し、國元の土産として亭主より直物語を承り書記をかれしを寫もの也、

又八南魚沼郡志の郷

文政十一年十一月十二日、四つ時大地震北部の人多く死す、

＊ハ南蒲原郡史ハ〇〇

文政十一年十一月十二日朝五つ時に地震があつて、三條町のみにて百十四人の死七者を出し、潰倒した家屋四百四十八戸、土蔵板倉二百七十四棟、同時に火災を起し、家屋七百六十三戸を焼失し、東本願寺掛所諸堂三個寺を焼いたと旧記に見えた、

＊ハ新郷市史

大政十一年十一月十二日の辰の刻ハ時俗に三條地震と稱するもの、古志、三島、蒲原の三郡被害最も甚しく、壓死者千四百四十三名、潰家一万一千七百五十戸として記録に存すれども、北越天変記によれば、即死三千七百二十四人、負傷者千八百四十三人、地盤に亀裂を生じて水砂を噴出し、家屋倒壊等莫大なる惨状を惹起せしものなり、新野縣地  
震調査書市中は浄土宗善導寺塔頭三ヶ寺もこの大震の被害を蒙り大破せしよし、川村長  
日記尚長岡藩領内及び新發田藩領内一帯の被害左の如し、一長岡藩注進の覺左の通

- 一 本丸住居向大破
- 一 多門大破ニヶ所
- 一 冠木門大破三ヶ所
- 一 内港ヶ所石垣崩壊、ニヶ所石垣崩

一 堀側三百二十二間

一 橋破損七ヶ所

一 土蔵大破三戸前

一 柵大破六十間

一 既破損老棟

一 所々地裂

但幅七八寸より二三寸程

一 冠木門破損五ヶ所

一 石垣崩五十七間

一 城外住居破損七ヶ所

一 團敷藏老棟

一 橋大破地形割七ヶ所

内港ヶ所地形崩傾

一 門大破七ヶ所

内ニヶ所石垣崩、一ヶ所石垣崩傾、四ヶ所石

垣崩壊

一 同大破千二百八十七間

一 橋詰石垣崩老ヶ所

一 鎮守社破損老ヶ所

一 御詰米藏二棟

一 役所破損五ヶ所

一 城外門大破、石垣崩、柏檜倒老ヶ所

一 堀側九十三門



一 無倒二十疔間

一 役所破損三ヶ所

一 家中潰家二十七軒

一 家中大破家百二十軒

一 同大破土蔵十六戸前

一 同大破家三十六軒

一 鳥居大破二十八ヶ所

内老ヶ所倒

一 杜家大破三軒

一 寺大破四十三ヶ寺

一 同大破家四十八軒

一 藏所大破七ヶ所

一 高札場大破大ヶ所

一 同大破家四千四百三十九軒

一 同大破土蔵百七十三戸前

一 田畑荒所九百五十五町七反歩餘

一 園堤大破迄万四千二百九十六間

一 用水江埋迄万五千九十九間

一 山崩六百六十五ヶ所

一 落橋五十五ヶ所

一 信濃川岸棚崩八百十三間

一 怪我人五百五十二人

一 怪城馬四尺

一 潰土蔵二戸前

一 尺野中間潰家百六十三軒

一 杜大破三十四ヶ所

一 潰杜家三軒

一 寺潰三十二ヶ寺

内老ヶ所焼失

一 城下町潰家十五軒

一 同大破土蔵三百八十戸前

一 番前大破三ヶ所

一 郷中潰家三千四百五十二軒

内八軒焼失

一 同潰土蔵二十戸前

一 同潰雜蔵十八戸前

一 道筋大破二千七百三十三間

一 樋水道大破二十ヶ所

一 用水溜池大破四十三ヶ所

一 倒木千八百四十六本

一 橋大破七十一ヶ所

一 死人四百四十二人

内男百九十八人女二百三十九人僧五人

一 變馬十六匹

右之外地裂、砂埋、山崩等にて所々破壊地場所あり、之致違之。(續野録)

〔新發田藩領注進の寛左の通り〕

朝五ノ時大地震、中の島組今町潰家焼失家怪我人夥  
敷、其の外組々も潰家等有之に付不取敢郡奉行被差  
出、當座御寺充として米五百俵御濟、翌正月に至り

一高札場潰一ヶ所

一潰板蔵二十七ヶ所

一堤破損一万四百十六間一焼死人二十七人

一潰家七百十五軒

内男九人女十八人

一潰寺八ヶ寺

一斃馬二十二匹

一破撰寺五ヶ寺

一田畑地割れ砂吹出湯二百

八十一町四反歩

一潰堂杜六ヶ所

一潰家千六百六十軒

一潰十藏十ヶ所

一破撰家五百四十四軒

一潰卷二軒

一焼失家百二十一軒

一焼失土藏十ヶ所

一壓死二百十五人

内男八十八人女百二十七人

一怪我人百三十六人

内男七十二人女六十四人

一怪我馬港疋

有之殿御届あり、

當国高田三條等尤甚敷、壓死焼亡間に不堪、潰家焼

失家死失人へ島目許多御寺充あり、

翌文政十二年五月十九日四千五十七兩迄分、加茂組  
大面組中の島組鶴森組赤波組五ヶ村潰家等に相成、  
小屋掛並農具入用御寺當同七月十二日一千六百三十  
六兩二朱餘右組潰家並に焼失家死失人御寺充、  
同月一千八百三十港向港弁餘渠通痛所御普請御入用

高（續前報）

＊〔戊子日記〕○籠水  
馬原著

十二日、戊申、大曇、五時地震、

＊〔救荒乘之杖〕○地後ノ指  
就國洞著

霜月十二日辰の魁涌原古志兩郡大震、又西は吉田町  
より東は加茂町迄（此間六七里）、南は長岡城より北  
は月馬迄（此間十里許）尤劇しく、潰家死傷等及牛  
馬の死せる幾千萬と云ふ員に及びぬ、加之三條見付  
町等を始とし、火災亦抄かろうず、其他の郡黨も地破  
裂して數十間奇泥を吐き、家傾き毀傷夥きも左まで  
死潰に及ばず、（按ずるに寛文五年十二月廿八日、  
當国高田大震より百六十四年におたるなり）世俗地震  
世ををしといへばやせど、寛文の地震も四年たちて  
諸国一月の饑饉となり、文政の地震も翌年より凶荒  
となり、又天保十年の地震も翌年饑饉、又四年たち  
て諸国一同の饑饉となり侍れば、惣て陰陽不順より  
としりて、以降は油断せず蓄積したき事也、

＊ハ校正王代一覽

十二日、越後国三條大ニ地震ノ地裂ケ、民家盡ク壊レ、出火シ壓シ焚シテ死スル者數ヲ知ラズ、

＊ハ新宮雜業記

同、大十一年十一月十二日朝五ツ時地震ニテ、越後國在々所々轉倒、別シテ三條町ト申所出火ニテ人多死、其年悪作ニテ白米一升八十大餘、当国ハ地震モ不大、作方ハ申通也、

文政十一年十一月十六日(西曆一八一八)江戸地震マ、強シ、

＊ハ戊子日記〇東沢馬琴著

十六日〇大坂十一年十一月壬子曇、終日寒氣難堪、林地震事也、同時に雨、終日不晴、子丑の間なるべし、

文政十一年十一月廿六日(西曆一八一九)江戸地震フ、

＊ハ戊子日記〇東沢馬琴著

廿六日〇大坂十一年十一月壬戌晴、夜五時地震、  
文政十一年十二月十三日(西曆一八一八)越後天色黄ナリ、

＊ハ救荒系之救〇救後、信

同十二月十三日、夜色快晴にして天色真黄也、  
文政十一年十二月十六日(西曆一八一八)江戸地震フ、

＊ハ續王代一覽後記  
同日〇十六日曉卯刻江都地震、

＊ハ戊子日記〇東沢馬琴著

十六日全午晴、正六時地震、

文政十二年正月五日(西曆一八一九)大阪地少シク震フ、

＊ハ摂陽奇観〇秋松歌國著

一五日〇大坂十一年正月二日、曉卯之半刻、小々地震、

文政十二年一月九日(西曆一八一九)江戸地震フ、

＊ハ續王代一覽後記

同日〇九日夜戌刻東都地震、

文政十二年正月九日(西曆一八一九)大阪地少シク震フ、

＊ハ摂陽奇観〇秋松歌國著

一九日〇大坂十一年正月辰上刻、地震少々、

文政十二年一月十九日(西曆一八一九)土佐地震フ、

＊ハ宮地日記

〇十九日晴辰刻地震、

文政十二年一月廿二日(西曆一八一九)江戸地震フ、

＊ハ續王代一覽後記

同日〇廿二日酉刻東都地震、

文政十二年一月二十九日(西曆一八一九)因幡國鳥取地震七、

數時間ヲ経テ地鳴ニ回アリ、

＊ハ因有年表

廿九日曉更地震、辰刻兩度地鳴、